

I. 多機能漢字と単機能漢字

1. 多機能漢字

漢字が漢字語を作るとき、自分を取り得るパートとして、次の7種類が考えられる。今、「別」という字を例にとると、この字は、7種のすべてを満足して、次のような造語パラダイムをもつ。

- ①自立素 別(別の、別に、男女の別がある、…は別として)
- ②2字語前素 別人 別種 別件 別物 別紙 別記 別院 別荘 別館 別間 別席 別段 別個 別離
- ③2字語後素 区別 差別 分別 特別 識別 判別 鑑別 大別 個別 送別 惜別 訣別 生別 死別
- ④接頭素 別世界 別天地 别人格 別会社 別部門 別問題 別企画 別種類
- ⑤接尾素 種類別 問題別 科目別 男女別 年齢別 世代別 業種別 経営規模別
- ⑥多字語内素 人別帳 愛別離苦
- ⑦重ね素 別々(別々の、別々に、別々だ)

パート数は最大の7で、各パート内の造語例や働きも多く、接頭素・接尾素としての造語に至っては、必要に応じていくらかでも出来てくる。以上は字音の「ベツ」に限って観察したが、訓の用法も入れれば、自立素としては「別れ」「別れる」。訓で「2字語」は扱いにくいので2語の複合語と捉えれば、その前素としては「別れ話」「別れ時」「別れ際」「別れ霜」、後素として「物別れ」「生き別れ」「死に別れる」、接尾素として「喧嘩別れ」「夫婦別れ」、重ね素として「別れ別れ」など、「別々」とは表現方向のやや異なる「別れ」の世界が5つのパートに色を添える。「別」は、文句なしの多機能漢字である。

パート数が7は無くても、「実」という字などは、どうか。

- ①自立素 実(実がある、実の親子、実に、実を言うと)
- ②2字語前素 実情 実地 実際 実演 実力 実践 実況 実用 実技 実態 実務 実業 実質 実物
- ③2字語後素 果実 真実 信実 虚実 不実 堅実 確実 内実 切実 写実 結実 史実 現実 無実
- ④接頭素 実目的 実社会 実人生
- ⑤接尾素 --無し--
- ⑥多字語内素 虚虚実実
- ⑦重ね素 --無し--

接尾素・重ね素としては働かないようだ(「実実」は「虚虚実実」でなければ使わない)が、そこを除いて、あとの5パートでは、よく働いている。「み」「みる」という訓もあるが、これは造語力が弱く、「別れ」の、独特な色合いを持つ造語力には及ばない。働きの幅は、「別」よりせまいけれど、なお、かなり多機能な字と見るべきである。

2. 単機能漢字

前回ブダペストでの発表「日本語漢字の働く姿」で「単語一語で頑張る字」と紹介した14字の中の12字を改めてこの方式で検査してみよう。

	逮	拷	賠	酪	雰	迭	濯	娠	肪	械	祉	訟
①自立素	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
②2字語前素	逮捕	拷問	賠償	酪農	--	--	--	--	--	--	--	--
③2字語後素	--	--	--	--	--	更迭	洗濯	妊娠	脂肪	機械	福祉	訴訟
④接頭素	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
⑤接尾素	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
⑥多字語内素	--	--	--	--	雰囲気	--	--	--	--	--	--	--
⑦重ね素	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

ということになる。これらの字は、どれも、ここに掲げた各1単語以外には、造語例を持たない。文字通り「単機能」の字である。それなら、こういう字は、日本語の語彙を担当する漢字として、多機能字より価値が低いのだろうか。そんなことはない。ここに並ぶ単語は、どれも、現代言語生活の中で大事な働きをしているものばかりだ。造語がたった一つでも、その一つがかけがえのない一つなら、それを書き記すのに必要な字は、現代日本

語のために必要で存在価値のある字なのだ。それゆえ、これらは常用漢字表の中に在る。

3. 独自機能漢字

パート数は少ないのに、妙な働きをする字がある。「者」という字を見よう。

- ①自立素 ー無しー
- ②2字語前素 ー無しー
- ③2字語後素 前者 後者 両者 学者 王者 記者 作者 強者 弱者 覇者 敗者 医者 業者 役者
芸者 信者 使者 著者 編者 筆者 武者 易者 読者 患者 死者 亡者 忍者 打者
- ④接頭素 ー無しー
- ⑤接尾素 統治者 為政者 応募者 受験者 合格者 入学者 在籍者 除籍者 入会者 退会者
新入学者 臨時入学者 裏口入学者 特別枠入学者 企業推薦枠特別入学者
- ⑥多字語内素 ー無しー
- ⑦重ね素 ー無しー

「者_者」と訓読みしたときは自立素になるが、それも、いきなり「者が…」とか「者は…」とか言うことはなく、「勝つ者があれば、負ける者がある」「特別の理由ある者はこの限りでない」のように、限定する修飾語が付かなければ使えない「者_者」だ。このことが「者_者」にも反映していて、2字以上の漢字語になる時も、決して先頭に立つことはなく、必ず後付きの字になる。そのかわり、その働きの旺盛で、造語例は大変多い。それでも、2字語の数には自ずから限度があるが、接尾素の働きとなると大変なもので、その場の必要に応じていくらでも作られる。最近では「脱北者」とか、変な言葉も作られ、大臣の国会答弁にまで現れたのは驚きであった。こんなふうにして出来るその場の単語を、林は「臨時一語」と呼んでいる。「者」という字は、パート数は2に過ぎないのに、造語の可能性には限度がない。こんな独自の機能を持っている。

独自機能漢字は、いろいろな形でいくらでもあるが、今は、観察をここでとどめ、次の問題を考える。

II. 漢字が「機能」をもたらす所以

1. 漢字の要素性

漢字は、日本語に入ってから特に、2字結合で1語と意識される度合いが高くなり、2字の日本漢語が、明治の文明開化で急激に増えた。そういう2漢字言葉は、使う人が頭の中で持ち運ぶ時の扱いは1語の扱いだが、何せ、漢字1字1字には意味があるから、頭が意味を認知するパルスの数は、とかく「2」となる。二つの意味要素がしっかり合体して1語となっている所が働きの絶妙なる所以で、この各字の要素性が、前項で見た7パートのパターンを作り出すから、そこにたくさんの単語が生まれ、「多機能」が生ずることになる。

国語教育でも日本語教育でも、多機能の漢字から基礎漢字を認定し、それらが造る単語のうち、よく使われて大事な働きをする単語から基礎単語と扱って、語彙教育の階梯を作っていくことが考えられ、現にそのような教育シラバスも各所に出来ていることと思う。教育基本語彙と教育基本漢字の研究と教育実践については、筆者も大いに耳を傾けたいと思っているが、今はその問題に触れず、漢字の要素性がもたらす漢字造語法の中から、いくつかの現象に目を止めて、暫く観察してみたい。

2. 連結器型接尾素

ブダベスト資料で「現代を映し出す字」として、化・死・系・族・剤・症・力・源・層、9字を取り出し、造語例を観察した。この中の「化」「系」2字は、

- 化 情報化社会 高齢化社会 少子高齢化社会
地球温暖化現象 産業空洞化現象 地盤液状化現象 都市人口ドーナツ化現象
- 系 塩素系漂白剤 炭酸系清涼飲料水 癒し系ミュージック 出会い系サイト 渡来系弥生人 お笑い系タレント

のように、接尾素のついた所で単語が終らず、接尾素つきの言葉が次の名詞を呼び込んで、長い臨時一語名詞を作る、そんな傾向を持つ接尾素である。且つそこには、「化」に続く「社会」と「現象」に見るように、呼びみたい名詞に、意味の類型がありそうだ。「～化すること」はみな「現象」に違いなく、「何々化社会」というのも「何々化現象が生じている社会」を問題視しているのだ。「系」の方は、特定の言葉に帰着してはいないが、類型性は感じられる。清涼飲料水は「清涼剤」として漂白剤と並ぶ物だし、癒し系ミュージックがあれば「ロック系ミュージック」もあっていい。弥生人もタレントも、「人」のタイプのそれぞれだ。「サイト」に至っては、場所を区切って指定する言葉だから、何々系サイトは無限にあり得る。

こう観察すると、ある種の接尾素は、次に来る言葉の概念類型を定め、それに合った言葉を見つけて接着する

ための連結器として働くことがわかる。

次に、「性」という接尾素で観察する。これが付く言葉に、「国民性」「県民性」「安全性」「特殊性」のように、そこで完結する「何々性」も確かにあるが、「急性肺炎」「慢性胃腸病」の「急性」「慢性」のように、後続の病名に限定条件をかぶせる働きをする「何々性」がたくさんある。この「性」は、連結器型接尾素の典型的なものである。

仮性近視 真性近視、アレルギー性鼻炎 アトピー性皮膚炎、早発性痴呆 老人性痴呆 老人性徘徊、
植物性毒素 動物性毒素 細菌性毒素、心因性精神病 心因性リウマチ、
のように、病名とか生理学的な存在を名付ける言葉に多いが、
一過性台風 停滞性台風
のようなものもある。

3. ブリッジ造語力をもつ接頭素

癌を抑える薬剤を「制ガン剤」とも「抗ガン剤」ともいう。制も抗も抑止する意味の動詞だから、VO語法で目的語「ガン」の前に置かれる。制と抗のポジション争いは抗が優勢で、最近はこちらをよく聞く。抗は「抗生物質」をはじめ、anti-の訳語となり、抗生物質に更に下位区分が付き、「抗カビ抗生物質」「抗結核菌抗生物質」というような命名がなされている。このごろは、抗生物質よりも

抗ガン剤 抗ヒスタミン剤 抗酒剤 抗真菌薬 抗精神病新薬 抗精神病治療新薬オランザピン
等の薬剤名で聞くことが多い。こう並んだのを見ると、「抗」が「やっつける」という意味を表す文字である以上に、怨敵の名の上に高く掲げる錦の御旗文字という印象を受ける。「抗」が接頭素として働き出しているのだ。そして、接頭素のあとに続く言葉に2段階の類型があることも分かる。

抗 ⇨ やっつけたい相手 ⇨ やっつけるための武器
という並び。相手の名が病名や病気の原因になる悪玉の名前で、武器の名が「剤」「新薬」「治療新薬」、即ち「薬剤」だ。簡略に言えば、「抗AB」が「Aに抗するためのB」という構造を作り、Bが「薬剤」に固定した中で、Aは、類型が「退治したい悪玉」と決まり、悪玉の顔ぶれが「ガン」「精神病」「ヒスタミン」「酒」というバラエティーで出現した、という成り行きである。こう表してみよう。

XAB : X=処理しかた A=処理さるべきもの B=処理施設
という定式が据えられる。その中で

X=動詞性接頭素「抗」

A=類型「人体の安全を脅かす悪玉」登録メンバーの誰か

B=「薬剤」かその類義語

と条件づけられた。Xは固定。Bは半固定。Aだけが、或る類型の中で用語に自由度がある。こうして表現活動が始まる。固定基地Xからクレーンが伸びて対岸に臨時基地Bを作る。両基地をつなぐ橋Aを注文に応じていろいろ作る。全体の形を整えるため、Bに補修を加えて完成。こういう造語過程があったと見る。これを「ブリッジ造語法」と呼ぶ。

同じタイプでもう一つ。「防」という動詞性漢字の接頭素働き。語例だけ並べる。

防風林 防雪林 防砂林、防波堤 防潮堤 防砂堤 防油堤、防火壁 防音壁

4. 二段成長型接頭素

前項の最後の語例群から「防砂林」と「防砂堤」とを取り出して並べると、「防砂」が先ず出来て、それに「林」が付いたり「堤」が付いたりしたという順序が見える。言葉が出来て行く順序は、勿論この方が自然で、そういう成り行きはあったろう。「抗」の場合でも、やや無理をして「ブリッジ造語法」を見つけたのだが、今よく耳にする「抗菌まな板」の「抗菌」に注目して

抗菌性 抗菌力 抗菌作用 抗菌処理 抗菌スペクトル 抗菌まな板

と並べて見れば、「抗」から「抗菌」が出来、その次の段階を表す言葉のあれやこれやが、代わる代わる「抗菌」に付く過程が観察できる。これを二段成長の造語過程と見て、この場合の「防」や「抗」を「二段成長型接頭素」と呼ぼう。二段成長、ほかの例を見る。

不：不良製品 不良債券 不労所得 不凍港 不凍液 不実記載 不採算部門 不完全燃焼 不逮捕特権

無：無人探索機 無防備都市 無失点演技 無農薬栽培 無反省男

要：要注意人物 要注意先(債券) 要保護児童 要介護老人 要修正文書

被：被圧地下水 被圧迫民族 被支配階級

漢字は、1字1字が、己れに備わる意味と語法性によって、他の意味体との関係を構成し得る、要素性・機能性を持っている。それが、多機能、単機能、独自機能など、いろいろな機能タイプを作り出す。そういう各字の

機能のほかにまた、接頭素や接尾素となるときには、ブリッジ造語性とか二段成長性とかのように、グループとして観察できる、類型的機能も発揮する。これらは、すべて、漢字の要素性がもたらすものである。

Ⅲ. 外来片仮名ことばの、漢字ことばと異なる性格

1. 基礎語段階でよりも複合語になった段階で受け入れられる

例えば、身体語彙で、

アイ(目) イヤー(耳) ハンド(手) フット(足)

これら英単語の意味を、大抵の日本人はよく知っている。だから、それらから出来ている複合語である

アイ ⇒ アイシャドー アイライン アイコンタクト アイマーク カメラアイ

イヤー ⇒ イヤリング イヤホーン

ハンド ⇒ ハンドクリーム ハンドバッグ ハンドブック ハンドアウト ハンドボール ハンドメイド

フット ⇒ フットボール フットワーク フットカバー フットライト フットノート アメフト

などの言葉を誰もが難無く理解し、日常、口にもしている。しかし、それらの基部にあつて、まさに基礎語の意味層に在る「アイ」から「フット」までの単語を、1語単独に用いて「アイにごみが入った」「イヤーを澄まして聴く」「食前にハンドを洗う」「フットに豆ができた」などと言うことは決して無い。

こういうことが、各意味分野の言葉にも起こっているようで、

サン(太陽) ⇒ サンシャイン サンビーム サンライズ サンセット

レイン(雨) ⇒ レインコート レインシューズ レインボー

ウーマン(女性) ⇒ ウーマンリブ ウーマンパワー キャリアウーマン

ライフ(生活、生命) ⇒ ライフライン ライフスタイル ライフワーク ライフスケジュール

などでも、右側の複合語は盛んに使うのに、基礎語に当たるであろう左端の言葉を、「レインが降る」のように用いることは、まず考えられない。基礎語彙の層には、母語である日本語の単語がしっかり据わっていて、日常の表現場面では、これら外来語の入り込む余地が無いのであろう。

2. 早く入った外来語は表現の基層にも入り込んだ

前項で見た現象は、外来語のすべてに有るのではない。文明開化の時期や、大正のおしゃれな時代に入って、それに当たる言葉も物も日本に無かったようなものは、そのままの姿で、日本語に入り、すっかり基礎語になってしまった。例えば、食生活に関するもので、

パン スープ ソース サラダ ナイフ フォーク スプーン コップ テーブル

などの言葉は、日本語生活基礎語彙の中で、その座がゆらぐことは、今後もありそうにない。その種のものは、各方面に、

シャツ ズボン ポケット カード ペン ガラス ボート ネーム チャンス テーマ クラス
など、たくさんある。

「ビール」(蘭語)は早く入って基礎語に。その後、英米語から入ったのは複合語で「ビアホール」「ビアガーデン」「ビア樽」「ライトビア」と専ら「ビア」。それでも「ビアを飲む」は言わず、「ビールを飲む」と言う。単独は「ビール」、複合は「ビア」と、担当を分けることになった。

3. 意味の一部が入って流通する傾向

「スター」は星だと知っているも「満天のスター」とは言わない。しかし「スターに憧れる」なら、みんなが言う。「ハート」が心臓であることもわかっているが、「ハートが痛む」と聞いたら、心の痛みだと思う。星の「スター」や心臓の「ハート」は、日本人の理解語彙ではあるが、使用語彙ではない。使用語彙の中では、「スター」は憧れのタレントで、「ハート」は温かい心情である。入って来た或る外国語が好まれて日本語に定着しても、それはその原語の働き的一部分でしかないということが、よくある。いや、「よくある」のではない。それが普通なのだ。そんな例をいくつか。

フロスト：霜。しかし、冷蔵庫の霜にだけ言う。

プラント：「プラントを輸出する」は工場設備の話。言葉は plant(植物)。植え付け→備え付け。なるほど。

ブランド：格好いいブランドもの。元来の意味は「烙印・焼き印」。

キャタピラー：戦車の無限軌道。元来は「毛虫・芋虫」。

マチエール：美術用語で「材料」「質感」。元来は一般用語で、素材・材質・内容・題目・事項、等。

4. 片仮名ことばのバラエティ

＝ニュアンスの違いを楽しむ＝

[集合住宅] アパート マンション レジデンス メゾン ハイム コーポ カーサ プラザ バレス シャトー
～ハウス ～ハイツ ～ヒルズ *原語の正確な意味は問題でない。

[豪華] リッチ デラックス ゴージャス グルメ レトロ *原語がどうあれ、何か違いを感じさせる。

=音形を変えて別語の如く=

ストライク・ストライキ リクリエーション・レクリエーション サプリメント・サプリメント

モービル・モビール・モバイル ボード・ボード

5. 渡来後に大事な部分が落ちて平気

オーバー=コート⇒オーバー *「コート」が落ちて「外套」。

フルファッションド=ホージャリー⇒フルファッション *hosiery が無くても「靴下」。

プレスト=ストローク⇒プレスト *プレストだけなら、単に「胸」だが、「平泳ぎ」。

ブロード=クローズ⇒ブロード * 広幅で入ったため、広さと関係ないのに、生地の名になった。

IV. 漢字語を支える各漢字の要素性と、片仮名ことばの「その語その語」性

漢字語では、各漢字が、言語使用者に、

①その字の、語としての、意味分野上の意味の確認

②文環境の中で、その字の立場---7パート中のどの「素」かの確認

③2字語・多字語の中にあるなら、その字の語法上の役割の確認

④接頭素か接尾素であるなら、その字の意味類の確認

という4種の確認を迫る。日本語の使い手が必要な漢字力を持っているということは、上記の確認が正しくできることである。正しくそれができる人は、単に漢字が読み書きできるだけの人ではなく、日本語の構成に要素性を持つ漢字が、プログラミング力となって頭に入っている人である。

漢字ことばは、言語ユーザーのこういう漢字力を前提にして成り立っているから、初めて出会った言葉でも、理解の流れの中で何とか処置できるが、片仮名ことばには、そういう要素性の基盤や背景が無い。人は、それに会った時、知った言葉ならよし、知らなければそれっきり。教わるほかに手はないのだ。

片仮名ことばでも、古く又は適切に日本語に入って、一般日本語使用者の基礎語に位置づいてしまった言葉はこの限りでない。それらは、漢字と同じように要素性を発揮するものになっている。筆者の内省基準から、比較的最近の言葉で且つその域に達している片仮名ことばの例を、いくつか挙げてみると、

プラン システム トップ リスク トータル ハンディキャップ パック イメージ タイプ スタイル
ユニット モード サイド ステップ

スタート ストップ ガイド アップ ダウン ドロップ クローズアップ

のようなもの。これらは、私の思考語として、便利で大事で、無くてならないものになっている。

かような類を除き一般に言えば、おびただしい数の片仮名ことばが、その言葉限りの言葉として、知らぬ間に入れ代わりながら日本社会の表層を流れて行く。そういう環境の中に私たちはいる。新語辞典、現代用語辞典、外来語辞典、片仮名語辞典、年鑑、これらの書は決して「典籍」というものではないけれど、いつも必要なものである。

(付) 日本語文字の類型的性格

現代日本語事情の中で、日本語各種文字の果たす役割を、傾向として、次のように捉えておきたい。

語彙文字----漢字----要素性語素文字

--片仮名--音単子性集合成語文字

語法文字----平仮名----構文運び文字(格助詞・係助詞・副助詞の類を書く)

--文末結び文字(活用語尾・助動詞の類を書く)

--自由間投文字(接続詞・感動詞の類を書く)

記号文字----アラビア数字

--ローマ数字

--アルファベット

記号文字は語彙語法の規制外にあって、話法の広がりや展望、抽象思考、構想立てなどに働いている。日本語は、大陸渡来の漢字を初め、各時代、遠来の客を、よく遇し且つ利用しているようである。